



～小笠原コーヒー生産部会が設立されました～

令和7年2月4日に、小笠原アイランズ農業協同組合小笠原コーヒー生産部会が設立されました。農業振興の上で、大変重要な出来事であり、農業センターも関係各所と共に引き続き協力させていただきます。



設立総会の様子

さて、小笠原のコーヒーの歴史は長く、明治時代にさかのぼります。父島・母島を含む小笠原群島が日本領と確定していない中、日本政府は小笠原の実行支配のために、小笠原での農業振興を考えていたようです。

この頃、沖縄等の他の亜熱帯地域と共にコーヒー栽培を始めるべく、当時オランダ領であったジャワからコーヒーの苗木を取り寄せた記録が残っています。コーヒー苗等を受け取り、亜熱帯農業の試験研究を行うため、農業センターの前身組織である「内務省勸農局小笠原出張所」が明治11年に設立されて、小笠原での試験栽培がスタートしました。

しかし、その後の小笠原農業はサトウキビ

や綿花、更にはカボチャ等の野菜類の栽培が盛んとなり、コーヒーの試験栽培は下火になっていきます。ついには苗木が島民に払い下げられて、試験は大きく縮小されました。島民の意欲も徐々に低下したようで、定植されたコーヒーも次々伐採されたそうです。

その後も戦争や強制疎開によって、小笠原コーヒーはつらい日々を送りましたが、昭和43年に小笠原が返還されると、農業者の子孫を中心にコーヒー栽培が再興されます。辛うじて残っていた樹を元に、農業者が丹精を込めて栽培し、「幻の」小笠原コーヒーは「知る人ぞ知る」コーヒーへと育ってきました。

小笠原では、パッションフルーツ・ミニトマト・島レモンの各生産者で生産部会を組織し、農業者の高い生産力と農協の高い販売力の両輪で、供給が追いつかないほどの「ブランド」を確立してきました。これらはひとえに農業者と農協の類稀なる努力によるものであり、今回生産部会が立ち上がった「小笠原コーヒー」についても、生産と販売の両輪がうまく機能して、小笠原を代表する農産物になることを期待しております。

引き続き東京都としましても、各部会主催の品評会や立毛共進会・品質測定会への協力、農業センターによる栽培技術の開発、農業経営指導担当による技術の普及指導等を通じて、支援を続けてまいります。

＜所長：北山＞

～令和6年度試験成績概要～

1. パッションフルーツの新たな生産体系の確立

●おがさわら丸ドック期間を除けた年2回 収穫作型における着果制限の検討

本作型における1回目結実前の着果制限により収量性が向上する他、12～1月において省力化が可能となります。一方、果実品質の改善は期待できず、定植時期や着果制限の程度を再検討する必要があります。(村田)

●パッションフルーツの早期収穫における 気温および日照と収量性の関係

パッションフルーツの早期収穫において、低温のほか、日照不足により樹体生育が抑制される可能性があることがわかりました。収穫の安定化には適切な着果数の調査が必要となります。(村田)

2. 農業センター育成カンキツ品種の栽培技術の確立

●「菊池レモン」の施設栽培における春～秋 期の被覆資材除去の検討(定植5年目)

「菊池レモン」の施設栽培で春～秋期に被覆資材を除去すると、年によっては開花期・収穫期が遅れました。被覆除去したうえで農薬使用を控えると、サビダニ類、ホコリダニ類の被害が増え、カイガラムシ類、ハダニ類の被害が減りました。(宮地)

3. 駆除外来樹の有効活用

●外来樹チップ堆肥と下水スラッジの栽培 評価

外来樹チップと下水スラッジを混和することで、チップ単独よりも早く昇温しました。栽培試験では廃菌床+下水スラッジ、外来

樹チップ+下水スラッジの堆肥施用で化学肥料、チップ単独堆肥よりもコマツナの生育が良好でした。(蜷木)

4. 遺伝資源の技術開発・保存・展示

●挿し木用土の違いがムニンフトモモの生 存・発根に及ぼす影響

ムニンフトモモの春挿し木には、パーミキュライトよりも赤色土の方で生存率が高く、発根も早くなりました。赤色土にパーライトまたはパーライトと堆肥を混合すると発根は早まりましたが、高温期以降の生存率が低下しました。(蜷木)

5. アフリカマイマイによる農業被害の抑制方法の検討

●父島および母島におけるアフリカマイマ イの分布(第17回全島調査結果)

令和6年前半は少雨だったためか、父島、母島とも生貝発見地点数、生貝密度は前回よりも減少し、父島については生貝の発見はありませんでした。ただし、降水量が回復すると活動しているマイマイが確認されました。(佐々木)

6. 小笠原の環境に配慮した病虫害防除方法の検討

●土中にいるイエシロアリの温水処理によ る殺虫効果の検討

ポット内の土中にいるイエシロアリは、50～52℃の温水をかけ流しポット内温度を48℃まで上昇させた後、47℃の温水槽で5分間浸漬すると処理後3時間で死亡率100%となりました。(佐々木)

7. 野菜・果樹・花き・切葉類の生産性向上

●ミニトマトの有望品種の特性把握

慣行品種の「甘っこ」と供試2品種の特性を比較したところ、産地がブランディングしている糖度の面から、「甘っこ」が最も優れていました。（直井）

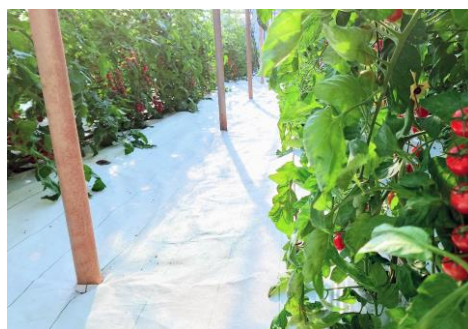


トマト栽培の様子

●小笠原における赤色ネットと反射シート

資材によるミニトマトのコナジラミ類の防除

縦横どちらも赤色とした赤色防虫ネットに加え、圃場表面に光反射シート資材を敷設することで、小笠原ではコナジラミ類の発生を低密度に抑え、薬散回数を大きく減少させることができました。（直井）



敷設された反射シート

●小笠原におけるコーヒー栽培の経営モデル

小笠原におけるコーヒー露地栽培の経営モデルを作成しました。10aあたりの所得は約47万円、所得率は62.8%となりました。（北山）

◎土壌診断実施のお知らせ

効率の良い土作りのため、土の定期診断を受けましょう。野菜では次作の畑の準備をする前、果樹では収穫が終わって施肥をする前がチャンスです。

茶碗一杯程度の土を採り、ゴミやホコリ等を取り除き、日陰でよく乾かして、目合い5mm程度のフルイを通して、紙封筒（提出場所で配布）に入れて、お名前、連絡先、畑の場所等を記入して下記の期限までに提出して下さい。

☆提出先 父島は農協父島支店、母島は農協母島支店です。

農業センターや営農研修所では受け付けておりませんのでご注意ください。

	土壌試料提出期間	診断結果のお知らせ
第1回	5月19日（月）～5月26日（月）	6月中旬
第2回	7月7日（月）～7月18日（金）	8月上旬
第3回	11月27日（木）～12月7日（日）	1月上旬

～ 着任職員の紹介 ～

きたやま ともひろ
北山 朋裕 亜熱帯農業センター所長

農業センターに着任しました北山です。4年間父島で研究職員として、3年間母島で普及職員として勤務し、この4月から父島での勤務となりました。

小笠原のためにこれまで以上に貢献していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



いたばし ゆうと
板橋 優人 研究員

初めまして、4月より亜熱帯農業センターに着任しました板橋優人と申します。3月まで立川市にある農林総合研究センターで、草花を担当していました。

少しでも小笠原の農業に貢献できるように、頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



になぎ ともこ
蜷木 朋子 営農研修所所長

新しく営農研に着任しました蜷木です。先年までの2年間は父島の農業センターで研究員をしていました。

普及のお仕事は初めてですが、小笠原の農業に貢献できるように頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします！



担当の紹介

令和7年度の農業センターの分担が決まりましたのでお知らせします。所長の北山は全体の統括を担当します。宮地はカンキツ類を担当します。佐々木は病害虫を担当します。板橋はパッションフルーツと自生種を担当し、当ニュースの編集も担当します。営農研修所については、直井はトマトを担当し、蜷木は普及指導担当となります。ご質問やご要望は各担当者が承りますのでよろしくお願いいたします。

帰任職員

令和7年4月1日付けで研究員の村田は東京都農林総合研究センター園芸技術科（立川市）へ異動となりました。長い間お世話になりました。